

清河八郎 「西遊草の道」

「元気・まちネット」踏査同行記

4

安政2年3月21日（1855年5月7日）、清河八郎は母亀代と伯母の政代、下男の貞吉を連れて鶴岡城下を出発した。

八郎の旅日記「西遊草」（東洋文庫）には「湯田川の温泉旅館鞆負（ゆぎえ）の2階でしばらく休み、あらためて酒宴を開き」「温泉旅館単人の家人たちも鞆負の家人たちとともに見送りに出てこゝろある。

「鞆負」は昨年まで営業していた鶴岡市湯田川温泉の大国屋旅館。元女将の佐藤祝子さん(73)は「ここには清河八郎の書簡や色紙が残っている」と話す。「単人」は現存する旅館で、戊辰戦争の際には新徴組が本部を置いた。

「西遊草」の県内ルートを検証する東京のNPO法人「元気・まちネット」（矢口正武代表）戸沢村出身の踏査隊は、湯田川温泉から小国街道の道筋を探り、徒歩で進んだ。

小国街道は鶴岡市街から湯田川、田川、木野俣、小国などを経て堀切峠を越え、新潟側に入る旧街道。390年前の1622（元和8）年に酒井氏が庄内に入部した際は、

難所続く峠道

山腹の洞窟に「千体仏」



鬼坂峠に向かう道から坂野下の集落や国道345号の高架橋が見えた
＝鶴岡市



この道を通った。古くは本街道の役目を果たしたが、峠が多く道幅も狭かったため江戸中期以降は浜街道の脇街道のようになつたという。庶民の道として伊勢参りや善光寺参り、他藩からの出羽一山詣などで利用された。

隊員らは湯田川の温泉街を抜け、大日坂峠の舗装された坂道を上った。頂上付近で細い道に入ると、大日堂跡の石碑がある。峠を下り田川の集落へ。集所になつている田川村役場跡の近くに「岩谷千体仏」の説明板を見つけた。

「西遊草」には「町田川宿を過ぎ、石体の千仏が安置してある岩屋に立ち寄り、間もなく鬼坂峠を越える」と書かれている。

説明板から少し入った山腹の小高い場所に洞窟があり、小さな観音像が多数並んでいた。難所が続く街道での安全を祈つたものだという。洞窟までの岩を掘り出したような階段は滑りやすかったが、隊員らは「隠れたパワースポットに出合った」と満足そう。

「西遊草」には「町田川宿を過ぎ、石体の千仏が安置してある岩屋に立ち寄り、間もなく鬼坂峠を越える」と書かれている。

このあと坂野下から旧鬼坂トンネルに向かう道を上り、途中から枝道に入つて鬼坂峠を目指した。カーブを登り切ると馬の背のような尾根道に出て、近隣の山々のほか眼下に坂野下の集落、右手には国道345号の高架橋が見えた。

やがて杉林の中の細い山道に入った。峠に着くと、鳥居の奥に鬼坂地藏堂跡の碑が立っていた。泣きだしそうな曇り空の下、峠を下るが、草が膝上まで繁茂して歩きにくい。倒木の下をくぐり、崩落しがれきを乗り越え、ようやく麓の民家にたどり着いた。

「鬼坂峠は道を整備すると楽しいトレッキングコースになりそうだ」と踏査メンバーの高橋茂さん(62)＝戸沢村津谷。

鬼坂地藏堂は1970（昭和45）年、坂野下の瀧泉寺に移された。寺には今でも庄内各地から地藏のお参りに来るという。伊藤宗弘住職(64)は「峠を普通通った親に連れてこられ、今も参拝を続けているお年寄りもいる」と話す。

清河八郎は「西遊草」に鬼坂峠の風景を「峠の頂に茶店がある。多くの村里を一望に見おろし、この辺では最も景色のよい所である」と書いた。鬼坂峠からの眺望を描いた昔の絵を見ると、遠く鳥海山まで見渡せたようだ。現在は樹木が高く伸びて頂上からの展望は開けていない。

（文）鶴岡支社・伊藤哲哉、写真＝同・色摩高幸